

昨年の夏に、60歳を過ぎてからの転居を経験しました。これまでの私事を題材に、転居について感じたことを書かせていただきたいと思います。

15歳まで伊丹市で過ごし、高校に上がると同時に府下の泉大津市へ転居しました。そして浪人時代に吹田市へ転居し、大学入学後は56歳まで35年間で京都市で過ごしました。京都市内では3度転居しましたが、34歳から56歳までの22年間で左京区の同一住居で暮らし

ました。ですので、そこが終の棲家になるものと何となく勝手に思い込んでいました。大学や職場、ご近所さんを中心とした人間関係が出来上がっていたことが大きかったと思いますが、四季が織りなす自然や街の風情に毎年新たに魅了され、まさに“住めば都、古都京都”でありました。

しかし、7年半前に思いがけず現在勤務している阿倍野区の病院への異動が決まり、これが大きな転機となりました。当時、大学の



医界サロン

住めば都

前広報委員

上田 祐二

同級生が同じ病院へ京都から電車通勤していましたので、最初はそれに倣い^{なら}ましたが、なかなか自分にはハードな通勤でした。そして案の定半年でギブアップし、妻とともに病院から徒歩5分の賃貸住宅に転居しました。

京都市の郊外から、大阪あべのハルカス裏の都会のど真ん中への転居でしたが、ぱっ！と、別世界が開けました。「あっ、やっぱり大阪もええやん。どこに住んでも楽しいんや。自分はそういう性分なんや」と、自分自身を再認識した感覚でした。もちろん、それまで人生の大半を京都で過ごしすっかり似非京都人になっていましたので、そこを離れたことに寂しさも感じました。「“ふるさととは遠きにありて思ふもの”とは、こういうことやったんか(?)」。

その後、大阪暮らしも5年以上が経過し、職場や地域での活動、医師会活動を通じて新たな人間関係の基盤もでき、60歳を過ぎまし

た。「コロナ禍が長引いて病院は大変やけど、ほちほちエエなにわの爺さんになってきた。クルマもなにわナンバーの軽に乗り換えた。もう京都には戻らんでもええなあ。今は借家やし、この先どうしよう？」と妻にも相談しました。その結果、昨年親戚も多く居住する浜寺公園近くの戸建てに転居しました。今はここを終の棲家にしたいと考えています。病院へもJR阪和線での通勤が便利です。転居後ちょうど1年が経過しましたが、「病院をリタイアする前に、早くご近所に良いかかりつけ医の先生を見つけといた方がいいよ」と、最近妻に説教されています。住めば都です。

*平成30年の5月から、勤務医部会枠の広報委員として4年余りお世話になりました。大阪府医師会報のコラムへの寄稿も3度目の今回が最終となります。ありがとうございました。